

フィールドワーク便り

コーヒーとベトナム

—ベトナム中部高原の先住民社会とコーヒー栽培—

下 條 尚 志*

ベトナムコーヒーの嗜み

ベトナムコーヒーをご存知だろうか。もしベトナムへ旅行し、喫茶店へ寄る機会があったら、地元の人々がどのようにコーヒーを嗜んでいるのか、よく観てほしい。コーヒーを注文すると、コップの上に怪しげなアルミ製の缶がのってテーブルにやってくる。ただの安っぽい玩具だと思って退けてはいけない。これは、ベトナムコーヒー独特の風味を逃さない、特製コーヒーフィルタなのだ。

フィルタからコーヒーの液がカップの底にすべて落ちるまで、読書をしたり談笑しながら、気長に待つ。すべて落ちたことを確認したら、熱を閉じ込めていたフィルタの蓋を裏返して、フィルタに残ったコーヒーがテーブルに滴り落ちないように底に敷く。それから、コップの底に沈殿しているコンデンスミルクとコーヒーをよくかき混ぜ、コップの二分の一ほどの量の水を入れる。こうして、ベトナムコーヒー定番の “cà phê sữa đá” (アイスマルクコーヒー) が出来上がる。氷をスプーンで割って濃厚なコーヒーを薄めながら、ちびちびと飲む。これは今回の調査で学んだ、いわゆる「通」の飲み方だ。

ベトナムコーヒーに関するウンチクを少々長く書きすぎた。だが、ベトナムには「ベトナムコーヒー」と総称されるようなコーヒー豆と、地域特有の飲み方が比較的長い歴史をもって育まれてきたということをイメージしてもらいたい。そして、今回フィールドワークで訪れたベトナム中部高原の先住民社会も、コーヒー栽培と開発の歴史と根深いつながりがあるのだ。

ベトナム中部高原コントゥム省にて

なだらかな起伏のはげ山が連なる上に、田畑や植林地が疎らに点在している。そこに北の方角へ不自然なほどまっすぐに国道 14 号線が伸びている。前日、コントゥム市で知り合ったガイドのロンさんから、近郊のダックハーという町にコーヒー農園があるという話を聞いた。中部高原の先住民とコーヒー栽培の関心に興味がある私は、そのひたすら直線に続く道を、ロンさんのバイクの後ろに跨って、コーヒー農園へと向かっている。このまっすぐな道路も風景もどうも違和感がある。それは、植民地時代から今まで、先住民の土地や生活を見捨てて開発政策が続けられ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真 1 コントゥム市内の木造教会

中部高原では民族を問わずクリスチャンが多い。

てきたせいなのだろうか。

民族誌によれば、植民地以前は、コントゥム省をはじめ中部高原には町や道路も一切なかった。鬱蒼と広がる山林地帯に、平地民のキン族が“mqi”（未開）と畏怖した先住民村落が点々とあるばかりだったそう。しかし、フランスによる植民地化以後、コーヒーや茶、ゴム栽培などに適したこの地は、町や道路、プランテーションの開発が急ピッチで進められた。それでも外の世界との接触が少なかった先住民集落がまだ数多く残っていた。しかし、植民地時代に続くベトナム戦争は、先住民の信仰対象であるヤーン（yang）が宿る森や山々を、激しいゲリラ戦の舞台にした。ついで空から枯葉剤も散布された。戦後誕生した統一政権も「進歩」の名のもとに農業開発や森林伐採を進めた。一方でこの一連の激しい変化のなかにあっても、中部高原へのキン族の移住は絶えることなく、ついに先住民は、この地域に限ってでさえ、統計的にも“少数民族”となった。

現在、ベトナムでは外国人が少数民族研究

を行なうことを、国民統合の観点から非常に警戒している。加えて中部高原は、土地問題に端を発した先住民による暴動が近年発生しており、政府は外国人研究者を容易に立ち入らせない。この暴動には、ベトナム戦争の混乱のなか、外部者によって蹂躪された中部高原の独立を求め、戦後アメリカに移住した一部のプロテスタント系過激派が関与していた。そのため、人権団体の圧力によって制裁を受けることを恐れた政府は過剰に警戒しているというわけだ。

今回、私が中部高原コントゥム省のコーヒー農園へ政府の許可なしで行くことができたのは、ガイドのロンさんのおかげである。この恰幅の良いヤクザまがいのキン族の男は、もともと旧政権の兵士でアメリカ軍の下で働いていたにもかかわらず、コントゥム周辺の公安警察とコネをもっているらしい。綱渡り的な調査であることに変わりはないが、政権の意図とは裏腹に、コネと賄賂によって行政の末端は動いており、そこにこの国の抜け道があることは間違いがなさそうだ。

あれこれと思いを廻らしていると、ずっと黙っていたロンさんが目の前の風景を指さして「コーヒー畑だ」と言った。そう声をかけられるまで全く気づいていなかったが、コーヒー畑を見るのは、恥ずかしながら生まれて初めてのことだった。人間の背丈よりやや高いコーヒーの木々には、蚕の繭のような真っ白な花が、枝に一定の間隔をあけながら咲いている。真っ青な空に対して一面に広がるコーヒー畑とそこを通り抜けている小道は、どこか懐かしさを感じさせるが、これもここ



写真2 調査を行なったコーヒー農園
どこまでも広がるコーヒー畑。

数十年の開発のなかで創られた景色なのだろうか。

農園の小道をたらたらと走っているうちに、ロンさんのバイクが白とピンク色の仰々しい建物の入り口の前で停車した。ロンさんは、その建物の前で井戸端会議をしている女性2人に声をかけ、話が済むなりそのコーヒー農園の事務所らしき建物のなかへ入るよう促した。なかに入ってしばらくすると、奥から農園の管理者らしき中年の男性が出てきた。私たちと握手を交わしロンさんが調査の旨を伝え、その管理者はインタビューに快く応じてくれた。この農園がいつから存在し、その歴史はどのようなものであったか。もともとこの土地はどのエスニック集団の、どの村に属する土地であったのか。ただ、それだけを知ることができればよかった。しかし、農園の管理者と直接話す機会を得たので、即席の質問を手当たり次第ぶつけてみたところ、いくつかのことがわかった。

このコーヒー農園はもともと1981年に国営企業として設立され、現在ではハノイに

本社をもつ会社が経営している。従業員は約500人で全員がキン族である。この会社は約1,500 haの農園を所有し、他の会社を合わせると、この一帯のコーヒー農園は約9,000 haほどの規模がある。生産量は1 haあたり3,000 tで、インドや中国、日本、ドイツ、イギリスへ輸出している。

この数値をみると、相当な量を海外へ輸出していることになるが、これはこの国に馴染みのない人であるならば意外かもしれない。仮に日本でコーヒー豆やインスタントコーヒーを買う時、パッケージの裏に書かれている生産地は多くの場合ブラジルやコロンビアなどだ。しかし、意外にもコーヒー生産量・輸出量ともにベトナムは世界2位だそうである。しかもその多くが、ここベトナム中部高原で生産されている。この農園で使っているコーヒー豆はインスタントコーヒーでよく用いられるロブスタ種で、安価で環境適応能力が高いために大量生産が可能なのだろう。一般的にロブスタ種はその特有の苦みから、他の地域で生産されたコーヒー豆とブレンドして飲まれる。だから、日本のスーパーなどの店頭には、ベトナム産と明示したコーヒーは置かれていないというわけだ。こうして、ベトナムコーヒーの生産量は、消費者の目に見えないところで着実に増加し続けてきた。

この農園が1981年に設立され、それ以前にはコーヒー畑がなかったという説明は、予想外だった。過去の民族誌でも描かれてきたように、フランス植民地行政は、先住民の伝統的な土地制度のタブーに触れないように慣習法を成文化し、彼らの土地を「借用」とい

う名目で農園に利用した。それから、焼畑などの季節農作業や儀礼と重ならないよう巧みに先住民に農園での賦役を課した。この体制が植民地時代末期には崩れ、やがて移住してきたキン族に農園は引き継がれた。その後現在まで、先住民の土地制度と慣習法を知らないベトナムの政権や企業に農園は利用されてきた。このようなストーリーがそのまま、このコーヒー農園の事情に当てはまるものと思っていた。

しかし、この農園は事情が異なり、70年代後半から80年代前半に行なわれた国家計画の一環で「国有地」として開発が行なわれた例なのかもしれない。農園の管理者によれば、農園に住み込んで働くキン族だけが労働者として雇われているそうだ。これは平地社会で過剰となった人口を山地開発の労働力として移民させた結果なのだろうか。となれば、この地に居住していた先住民はここ30～40年の間に別の地へ移住を余儀なくされたことになる。「もともとこの土地は誰の土地だったのか？」という疑問が喉の奥まで出なかったが、もともと国営だった企業の管理者にとってこれは理解しえない質問に思えたので口を噤んだ。

ロンガーオ族とコーヒー栽培

コーヒー農園での聞き取りが終わった後、ロンさんがこの農園の近くでコーヒー栽培と焼畑を行なっているロンガーオ族の村落があると云った。先住民による世帯規模のコーヒー栽培はコントウムでは珍しいため、その村へ向かうこととなった。広大なコーヒー畑

のなかを走っている途中、大海の無人島のように農園労働者のあばら屋があるのを見つけ、からからに乾いた喉を潤すためにそこへ立ち寄った。茶飲み話ついでに、そのキン族の労働者がどこの出身であるのか尋ねたところ、北部出身とのことであつた。ということは、ベトナム南北統一以後に移住した労働者ということになる。1980年代半ばドイモイ（刷新政策）の下で市場経済化が行なわれ、移住の規制がなくなると、大量のキン族が換金作物栽培を目指して中部高原へ移住したそうだ。平地からの移民は中部高原の土地がコーヒーなどの換金作物と結びついているため、もはや途絶えることのない潮流となっている。

その後、再びバイクに跨り、1時間ほどしてようやくロンガーオ族の村落に到着した。ロンさんが言うように、確かに何軒かの家の庭先にコーヒーが栽培されていた。だが、コーヒーを栽培する家は数えるほどで、そのうち何軒かはコンクリート建ての比較的立派な家であるのに対し、栽培していない家は伝統的な高床式でもない、茅葺のあばら屋であつた。おそらく、今やコーヒー栽培は先住民の生活水準を規定する指標なのだろう。しかし、いずれにしても、ダックハーの大農園に対してロンガーオ族のコーヒー栽培はあまりに貧相で、やがて消滅してしまうのではないかと思わせた。

このロンガーオ族のコーヒー栽培を見た後、ダックハーのコーヒー農園とロンガーオ族のコーヒー栽培は無縁なのだろうか、という疑問がふと湧いた。地理的な距離からいつ



写真3 ロンガーオ族のコーヒー畑をもつ家



写真4 ロンガーオ族のコーヒー畑をもたざる家

今やコーヒー栽培は村落のなかでの権力関係を決定するひとつのステータスなのかもしれない。

でも、相互の関係を疑ってみる必要はある。コーヒー農園の管理者は、1981年以前コーヒー農園はなかったと主張した。だが、かつてロンガーオ族がコーヒー栽培や焼畑を行っていた土地に、その地の利を知った政府や企業が大農園を開いた、と想像するのは、あながち妄想ではなかろう。いずれにしても、先住者に対する配慮を欠いたまま、コーヒー農園という不自然なほど均質的な空間が、たった30年ばかりの間で作られたということは確かだ。

おわりに

コントゥム省の南にあたるダクラク省では、コーヒー栽培が大変に盛んで、90年代のコーヒーバブルが2000年にはじけたことによって大打撃を受けた。ダクラク省ほどの生産量はないコントゥム省だが、世帯で取り組んでいるコーヒー栽培は、価格の変動によって大きな影響を受けるに違いない。やがて、不安定な世帯規模のコーヒー栽培よりも、企業が経営する大規模なコーヒー農園

が、競争に勝ち残っていくのだろう。近年起こった先住民の暴動は、実はコーヒー価格の大暴落とも連動していたといわれている。

中部高原の先住民社会がキン族に一方的に抑圧・搾取されてきたというつもりは全くない。ただ、先住民社会のあり方を根本から揺るがし続けた直接的な要因は、多くの研究者が強調してきた植民地主義や国民国家建設過程、戦争、社会主義の影響など政治的な言説よりもむしろ、その政治的状況下のなかで急速に浸透し続けた商品経済や平地の人々の中部高原への移住の影響など経済・社会的変容にあるように思える。特にコーヒーという農作物は、植民地時代から現在まで、その経営母体や労働形態を変質させつつも、絶え間なく拡大し、一攫千金を狙う人々を魅了した。国家規模での中部高原への移住事業も行なわれてきたが、ベトナム戦争中さえフランスが放棄したコーヒー農園を求めて多くの平地の人々が自発的に中部高原へ移住した。このような人間の草の根の経済活動や生活力に畏敬の念を覚える一方で、そのなかで地域社会の

コミュニティのあり方が忘却されてきたことと、それに付随して生じてきた過去の血生臭い暴力沙汰に違和感を抱く。が、中部高原の

コーヒー栽培は、かつてのゴールドラッシュのように、開拓者を盲目にしてしまうのだろうか。

「木の人」

—植物の名前をもつ人びと—

八 塚 春 名*

タンザニアのサンダウェという人たちの村でフィールドワークを始めた頃、私のもっぱらの作業は、植物を採集し、方名と用途を尋ねることだった。「この木の名前は?」「何に使うの?」という簡単な会話でもなんとか作業ができ、毎日増えていく標本によって、目に見える形で「調査をしている」という実感が湧く。まだ言葉もろくに話せない、調査の仕方も分からない、慣れないことだらけの新米フィールドワーカーにとって、これほどやりやすい調査はなかった。毎日歩いて、植物を採集し、名前を聞く。こんなことを繰り返していたある日、ふと気付いた。友達になった女の子の名前と、採集した植物の名前が同じなのだ。そういえば、お世話になっている家のお父さんの名前も、お母さんの名前も、植物と一緒に。「そうか、かれらは植物の名前を人の名前に付けているんだ!」そう気付いた時、私はとてつもなく大きな発見をしたかのように、うれしくて、わくわくしたことは今でもよく覚えている。

それ以降の私の植物採集は、もっぱら「あなたの名前の木はどれ?」から始まった。レバーさん、アマタさん、ゲレさん、デゲラさん、カツァワさん、ホアさん…出てくる、出てくる、植物の名前。これまでに私が聞き取れたものは、男性の名前になっているものが 25 種、女性の名前になっているものが 20 種である。もちろん例外もあって、たとえば鳥の名前や星の名前など、植物由来ではない名前をもつ人もいる。しかし村の多くの人たちは、45 種の植物の名前を共有している。男性ならゲレさん、レバーさん、デゲラさんなんて山のようにいるし、女性もカツァワさんやホアさんなんて、一家にひとりいるんじゃないかと思うくらいに多い。そしてある日私にも「テンカ」という名前が付けられた。テンカ (tenka: *Grewia praecox*) は、シナノキ科の木本植物で、小さくて黄色い花がたくさん咲き、全体的にこんもりした木だ。乾期の終わってから雨期の初めにかけて、小さくて、砂糖のように甘い実をつける。サンダ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科